多摩地域史研究会会報

第 172 号　　2026（令和 8）年 8 月 20 日発行

E-mail.tamatiken@yahoo.co.jp
（ホームページ現在休止中）

【第34回大会報告】今回の大会は参加者66名が集い、内容の濃い議論が展開されました。その模様は、北村拓氏の参加記をご一読ください。

第34回大会「前方後円墳時代の多摩」参加記

北村　拓
（東京都立国分寺高等学校教諭）

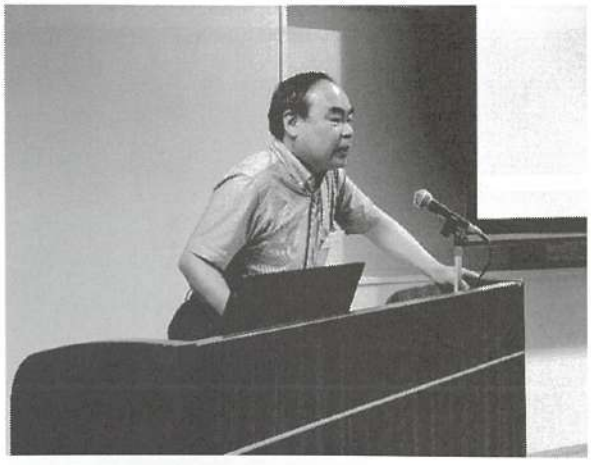
7 月 12 日に、たましんＲＩＳＵＲＵホール（立川市民会館）で開催された多摩地域史研究会第 34 回大会「前方後円墳時代の多摩」は、注目度の高い考古学的なテーマでもあり、会場は大半の席が埋まった。

今大会では本会事務局の梶原勝氏による基調報告に続いて、午前 1 本、午後 2 本の発表が行われた（このほかに紙上発表が 1 本）。

基調報告では、大会の目的が二つ挙げられた。第 1 は、弥生時代と古墳時代との区分である。多摩地域では弥生時代後期後半から古墳時代前期までの連続性が見られる一方、古墳時代前期から中期にかけて集落が継続しないという事情への目配りが必要だということである。第 2 は、古墳時代中期（5 世紀）のヤマト政権の支配拡大が多摩地域に与えた影響である。古墳や集落、災害、渡来人と馬など多角的な視点から考察する。

以下、今大会の 3 本の報告と討論について、高校日本史教員の立場から感じたことも交えながら述べたい。

第 1 報告は、浜田晋介氏（日本大学特任教授）による「古墳時代中期の変革と多摩」である。古墳時代を概観しながら、多摩地域の状況について古墳時代中期（5 世紀）を中心に論じられた。近年は、画一的な設計による大型前方後円墳の出現は 3 世紀中頃以降とする説が有力視されている。古墳時代中期には前方後円墳の規模が最



基調報告　梶原



第 1 報告　浜田晋介氏